

むさしあぶみ 原文一部抜粋 読み下し文

前頁より

(一什) 同に焼け上がり黒煙り、天を焦がし、車輪程なる焰飛びちり、風に放されて雨の降る如く、大勢群がりいたる上に落ちければ、頭(カシ)の髪に燃えつき、袂(タビ)の内より焼けだし、誠に堪えがたかりければ諸人あわてふためき、火を逃れんとて、我先にと霊岩寺(霊巖寺)の海辺を指して走り行き、泥の中に駆け込みけり。

寒さはさむし、食は食わず、水にひたりて立ちすくみ、火をば、逃れたりけれども、精力つきはて、大方凍死(コノシヅ)す。猶、それまでも、逃げのぶることの叶わざる、ともがらは、炎五体に燃え尽きて悉く焦がれ死す。

うめき叫ぶ声すさまじく、もののあわれを、とどめたり。すべて水火、二つの難に死に亡ぶるもの、九千六百余人なり。此の海辺まで、ちりも残らず焼き払い、海の向かい四五町、西の方佃島のうち、石川大隅守の屋敷、同じくそのあたりの在家一字も残らず焼け失う。

●明暦3年(1657年)1月18日から19日にかけて、江戸で発生した『明暦の大火』は、3件の大規模火災の総称である。

1件目は、1月18日 本郷丸山の日蓮宗 本妙寺から出火

2件目は、1月19日 小石川新鷹匠町から出火

3件目は、1月19日 麴町から出火。

●ここに記載のある火災は、本郷の本妙寺から湯島、駿河台へと燃え広がり、駿河台から日本橋、八丁堀まで達し、霊巖寺のある霊巖島へと延焼し、霊巖寺に逃げ込んだ9,600人あまりの生命を奪った状況を述べています。